

荒廃した世界で兎は跳
ねる

うっちい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

土埃舞う荒野、どこまでも広がる不毛な砂漠、廃虚と化したゴーストタウン。荒廃した世界に響くのは異形のモンスターの唸り声とそれをかき消すような銃声である。

ガンゲイル・オンライン、通称GGO。

世界観や銃器メインの対人戦が盛んなため、ゴツイ男達が己の相棒片手に撃ち合うそんな世界に最初期の頃から一人の女性がログインしていた。

SAO生還者、プレイヤー名ネージュ。

GGO内でも珍しい小柄な身体に左右の耳下でくくった長い白い髪、特に目を引くのはルビーの様に赤い瞳。髪に合わせた全身白で統一したシヨートパンツ型の戦闘服を着用し全身をカモフラージュ用のロープで覆い隠しながら、小型の光学銃を片手に今日もぼつちでダンジョンに引きこもる。

ある日、このままではいけないと感じた彼女はダンジョン引きこもり生活に終止符を打つところから物語は始まる。

初投稿です。

原作のファントムバレット編と時雨沢先生のGGOが好き過ぎて勢いのまま書いていたため、矛盾等あるかもしれません。銃器の知識は調べてはいますがFPSや映画等で得たものであるため間違いや勘違い等あると思います。ここが違う、そんな事できない、矛盾、誤字脱字などの指摘は気軽に言ってください。気づきしだい修正します。

基本原作沿いに進める予定です。

目次

S
A
O
生還者

1

SAO生還者

ああ、またこの夢だ。

目の前で親友である幼馴染が吹き飛ぶ。その身体からは血の様な赤いダメージフェクトがいくつも刻まれている。地に倒れ伏した親友がこちらを向き必死の形相で何かを叫ぶ。だが、音は何も聞こえない。聞こえないが何を言っていたのかは覚えていない。

”逃げろ!”

私の身体は動かない。確か初めてのPKに恐怖で竦んでいたような気がする。視線は嫌な笑顔を浮かべた襲撃者であるパーティメンバーであった3人に向けられたまま、3人の目的は親友の持つレアアイテム。3人のうち一番STRが高い1人が大剣を振り上げた。庇えば助かるかもしれない、その一撃を食らっても私自身のHPは全損まではないかないと知っている。

大剣は振り下ろされ、叩き付けられたのは私ではなく親友。私は動けなかったのである、我ながら情けない。赤いダメージエフェクトが瞬き、次の瞬間に親友の身体は青いカケラとなって空へ消えた。その死ぬ瞬間の表情が頭から離れず、その場で塞ぎ込んでしまいたくなるが、身体は当時の動きをトレースするだけだ。気がつけば、その場には私一人しかいなかった。

次々と場面が切り替わる。食事に毒を盛られ殺されかけ、待ち合わせ場所に待ち伏せされ、ギルドメンバーに背後から襲われて。どれも流れは似たようなもので、裏切りにあい親しい人が死んでいき最後は私一人になる。

私自身がまるで忘れるなどいつているように繰り返す同じ場面を繰り返す。この夢は朝目覚めるまで繰り返し続けるのを私は知っている。あまりにも同じ夢を見続けた結果なのか心が麻痺しているのか、私の心は何も感じない。親友が殺される瞬間を無感動に眺めるだけ。

私の身体は仲間の血で染まっている。

閉じた視界に光がちらつき、夢から覚めた事に気がついた。起き上がり、軽く伸びをして身体をほぐす。S A O帰還後すぐにあの悪夢を見始めた。当初は悲鳴を上げはね起きたり時にはパニックに陥り泣きじやくり、あまりの酷さに病室を個室に移されるほどだった。夜中に良く様子を見に来てくれた看護師さんとカウンセラーの先生には頭が上がらない。結局悪夢は去らなかったが人間慣れる生き物なのか、もしくは心が麻痺してしまったのか今は問題なく寝起きできている。ベットから降り、簡単に身なりを整え、日課の早朝ランニングのため家を飛び出した。身体を動かすことで体力をつけ、眠気を覚ます。S A O生還後に始めた事の1つである。

ランニングを終え、シャワーを浴びスッキリしてから家にあつた菓子パンで朝食を簡

単に済ませてしまう。一人暮らしはこういうところが楽でいい。行儀悪く菓子パン片手に冷蔵庫を開き、牛乳をコップに注ぐ。決して凹凸が少なく平均より小柄な身体を気にしているわけではない。成長期にSAOへ囚われた結果がこの身体なのだ、私は悪くないのである。昔から運動は好きなので体力はあるのだ。生還後に身体を鍛えなおし、体調は前より良くなったほど。牛乳を一気に飲み干し、コップは洗って戻しておく。

今日は学校は休みである。先月入学したばかりの新造学校はSAO生還者サバイバーが集められた高校であり、見たことある顔が何人かいたはず。しかし、SAO内でぼっちを貫き通した私は知り合いはいても友はおらず、学校が学校であるため中学の友人とも離れられなれ。休日は何も予定がなく暇を持て余し、新しく始めたのがVRゲームである。SAOの一件で一度離れたが、数ヶ月で舞い戻ってしまった。やはり昔からゲームの私はゲームから離れられないのだろう。

頭にアミュスフィアと呼ばれる機械をつけ、ベットに再び横になる。休日の朝からゲームとはダメ人間みたいに見られそうだが、学業に影響は出てないし規則正しい生活を心掛けているため問題はない。たとえばそれ以外の時間が全てゲームに費やされていたって問題はないはずである。・・・たぶん、きつと。バイト？ゲームでそれなりに稼

げてるし、うん。そもそもこのゲームを始めたのはコミュ障・・・ではなくカウンセリングで緩和したとはいえ、SAOで人間不信に陥った自分を変えるためであり理由はあるのだ。アミュスフィアを起動し準備を整えてから私は誰でも使える別世界へと飛び込む魔法の呪文を唱える。

「リンク・スタート」

これから飛び込むはSAOとは全くジャンルの違う銃弾飛び交う荒廃した世界、ガンゲイル・オンライン。通称GGOだ。

どこにでもいるゲーマー女子だった私をミリオタへの道に引きずり込んだ元凶である。